

創作と批評の共振

60年代後半以降、多木が評論の対象にした同時代の建築家は決して少なくないが、ある時間的な広がりの中、複数回にわたって作品を論じた建築家となると数が限られる。本誌の著作目録を参照すれば、篠原一男、磯崎新、白井晟一、伊東豊雄、坂本一成、長谷川逸子、レム・コールハース、妹島和世らの名前が挙げられるだろう。また、八束はじめとは言論活動の面で多くの協同がある。それぞれの建築家との関係は様々だが、今回インタビューした坂本一成との関係もとりわけ興味深いものだ。15歳ほど年が離れた両者は、単に作品と評論だけの関係にとどまらず、人間としての信頼関係に根ざして、深い思想的な交流があった。多木からの影響という点で言えば、それはおそらく先に挙げた建築家の誰よりも、強く坂本に見いだせるに違いない。

このインタビューは全4回、合計20時間以上にわたり、多木による批評や多木との関係を軸にしなが、建築家としての坂本の歩みを辿ったものである。そしてインタビューに続けて、多木が書いた坂本論の主なもの7本を再録した。両方の内容を往復するなかで、多木の活動のひとつの軌跡を描くとともに、創作と批評の相互に生成的なあり方を考えてみたい。なお、坂本関連の図版はアトリエ・アンド・アイ 坂本一成研究室の提供による。

第1回

収録：2012年10月12日

1964-1976

多木浩二との出会い
1976年の「再会」
多木が捉えた《代田の町家》
それぞれの空間性——坂本一成と伊東豊雄
多木浩二の篠原一男論
篠原一男論の変遷
《上原通りの住宅》と《代田の町家》

多木浩二との出会い

——今日は第一回ということで、一九六五年に初めて多木さんとお会いになってから、七六年に《代田の町家》(1976)の評論が書かれるまでについてお話しいただきます。また、お二人にとって非常に重要な人物として篠原一男さん(1909-2006)がいるわけですが、多木さんが書かれた篠原論を考えることで、お二人の関係性が見えてくるところもあるのではないかと思います。ではまず実際にどういった出会いがあったのでしょうか。

坂本 七六年からお付き合いが始まって、強い影響を僕が受けることになるわけですが、それまではないんです。多木さんが最初に篠原先生について書いたのは、『ガラス』という雑誌の一九六四年四月号ですね。篠原先生の展覧会について「美しい宣言——デパートの中に建った2つの家」篠原一男展を見て「[*]」というクリティックを書かれた。この六四年の四月というのは僕が東工大の学部三年生になった時で、僕もこの展覧会は観に行っただけです。そうか建築家というのはこういうことをするのかと、素朴に強い印象を持ちました。ただ、その時は多木さんの展覧会評は読んでいない。もちろん後で知ることになります。

で、そこから多木さんと篠原先生のお付き合いが始まることになりましたが「*」、僕は翌年、六五年の四月に篠原研に入る。それで研究室にいますと、多木さんが先生のお客さんとし

て来るわけです。そういう光景を何度か見た。その時あまり言葉を交わしたような記憶はないのだけでも、たまたま僕がその六五年の夏にヨーロッパに行くことになって、多木さんもヨーロッパに行くこと。ちょうど海外に自由に行けるようになった翌年でした。僕もマドリッドに三、四ヶ月いたけれど、日本人には三人くらいしか会わなかったという、そんな時代です。だから多木さんとも、お出でになるなら向こうを一緒に見て回りましょうという話が出た。実際には実現しなかったんですけども。

それでそのまま僕は大学院へ行って、何度か多木さんが出でなくなったところをお見かけした。月に一度か二月に一度くらいだったと思います。あるいは二人で外でお会いになっていたかもしれない。おそらく篠原先生は、作品ができた時にお見せしたり、途中で意見を聞いたり、そういったコミュニケーションがあったのだと思います。ただ、篠原先生は秩序を重んじる方ですから、僕らが直接多木さんとお話するというようなことはなかった。ただ、先生が多木さんと話された後、先生はお酒が好きでしたから、夕方からお酒を飲む時にみんなを集めて、今の建築の状況に対してどういう見方ができるかといったお話をされて、僕らに意見を求めたというようなことはあったと思います。

——多木さんも坂本さんと初めて会ったときのことを回想しています。

多木——そのころ篠原さんと本当によく会っていたけれども、あるとき坂本さんを連れてきた。そのときから篠原さんが、坂本さんにある期待をもっていたことがよくわかったんです。(坂本一成・多木浩二『対話・建築の思考』住まいの図書館出版局 1996, p.83)

ただ、それ以降、特に大きな接点はなかった。坂本 僕は研究室に一九七一年までいたわけですが、入った時は《白の家》の設計が始まった頃で、その後《花山北の家》(1969)ができて、《白の家》(1968)、《花山南の家》(1968)ができた。あと《山城さんの家》(1967)は大橋晃朗さん(1938-93)が担当して、すごく苦労しておやりになっていたのが印象的でした。それで《未完の家》(1970)、《篠さんの家》(1970)、ここま

でかな。だから篠原先生にとつての一つの充実した時期に在籍していたわけですが、僕は学生でいたものだから設計に関わることはありません。現場も竣工した時や撮影の時に観に行ったというだけです。他の方々、例えば白澤(宏規)さんや長谷川(逸子)さん、大橋さんたちはスタッフとしていたけれど、おそらく多木さんとの関係も、スタッフとして関わってあればもうすこし多くの接触があったかもしれない。で、いま思い返してみると、多木さんの「異端の空間——篠原一男論」(『新建築』1968.07)が六八年で、重要な篠原論はほとんど

[*2] 多木本人の回想では「美しい宣言」を読んだ篠原から手紙が届き、それをきっかけに初めて篠原と会ったとされる(後掲「篠原一男を憶う」)。ただ、実際には両者はそれ以前に会っていた可能性がある。「美しい宣言」が掲載された『ガラス』の前号(1964.03)には、篠原一男・近藤正一・池辺陽による鼎談「住宅——現代建築の中心課題」が載っているが、当時多木は『ガラス』誌の編集をしており、その号の編集後記の内容を考慮しても、「編集部」と表記されている鼎談の司会者は多木である可能性が高い。

[*1] 篠原一男と朝倉摂の2人展「デパートの中に建った2つの家」(小田急百貨店)および篠原一男『住宅建築』(紀伊國屋新書、1964)をめぐる評論。